

## 巻頭言

多文化共生研究所長 小池 康弘

本研究所が正式に設置されて10年が経過した。初代所長の稲村哲也先生、それに続く杉山三郎先生につづき、私が三代目の所長を務めることになった。浅学菲才の身ではあるが、今後も研究所の機能を充実させ、活動を一層盛り上げていきたい。

さて、10年前と比べて「グローバル化」の潮流自体には大きな変化は起きていないように見えるが、一方で「グローバル化」は先進国においても様々な形で新たな挑戦を受けている、というのがここ数年の状況である。トランプ政権による「アメリカ第一主義」とTPPからの離脱、イギリスのEU離脱（Brexit）などもその表れであるし、米中摩擦の背景には、知的財産権保護や安全保障上の問題があることは明らかだ。他方、日本国内に目を向けると、少子高齢化社会の進展に伴う人手不足は、経済成長や社会的持続性を脅かすほどに深刻化しているが、政府は2019年になってようやく「外国人材」の受入拡大を進めることを決定した。だが、そこには、人間、生活者として受け入れるという視点が欠けているように思う。こうした内外の様々な課題を含め、本研究所は広い意味での「共生社会」を考える研究組織としての役割を果たしていきたい。

そのために、学内の研究リソースを最大限活用しながら、海外研究者との協働や地域社会との連携をさらに発展させていく。また新たなチャレンジとして、学部を越えた共同研究の実質化や、若手研究者の育成という観点から大学院教育にも積極的にコミットしていくことも、重要な活動の柱として取り組んでいく。